

文学部
古文書室展 V

国のうち・そと

2017年10月10日(火) — 11月2日(木) 10時-17時

慶應義塾大学アート・スペース (土・日・祝日閉館・金曜19時まで) 入場無料

Relations with Neighboring Countries in the Edo Period

THE WORLD OF PALEOGRAPHY V



文学部古文書室展Ⅴによせて

文学部古文書室展も、今年で五回目となりました。初めて開催した文学部古文書室展Ⅰ(2013)では、「野村兼太郎収集資料の世界」として、農村関係文書主体の、古文書室展Ⅱ(2014)では、「「武」を記録する」として、武家関係文書を中心に展示会を行ってきました。一昨年の古文書室展Ⅲ(2015)では、「幕末を記録する」というサブタイトルを付け、二条家文書の中から、幕末期を象徴するいくつかの出来事を選び、その関連史料の展示を行いました。展示会に合わせて、都合 2,300 点ほどになる本室所蔵二条家文書の古文書検索システムへの登録と、一部資料の画像による公開も実現しました。

昨年の古文書室展Ⅳ(2016)では、「書き留められた移動」というタイトルで、江戸時代の日本における、天皇・公家、武家、庶民といったさまざまな階層の人々による、多様な移動が記録されている古文書、記録、絵図などを紹介しました。

五回目となる今回は、「国のうち・そと」というタイトルで、古くから日本と深い関係を持ってきた、地理的に隣接する朝鮮・琉球・蝦夷の「三国」にかかわる江戸時代の古文書・記録・絵図などを中心に展示します。17 世紀前半にゆきついた特殊な対外関係のあり方（いわゆる鎖国）を続けて来た日本が、それら近隣の国々と維持して来た関係と、「国のうち」側とのかかりについて、本室所蔵資料に依って考えてみたいと思います。

19 世紀中頃には、国内政治・経済・文化全般にわたる大きな変動と、欧米列強からの強い圧力とが交錯してゆく中で、開国・維新の道を辿り、やがて「三国」の全てを一度は「国のうち」にとりこむまでに至ったことは周知の通りです。江戸時代における最も近い隣人との関係を想像してゆくことを通じて、これから私達が丁寧に作り上げてゆくべきものを考える手がかりが得られればと思います。

慶應義塾大学文学部古文書室

展示会協力

慶應義塾大学三田メディアセンター

原口 泉（鹿児島県立図書館館長）

赤木 妙子（目白大学教授）

倉持 隆

（慶應義塾大学三田メディアセンター貴重書室）

高木 庄一（弘南堂書店）

横山 恭子（富山高専専門学校助教）

文学部古文書室

柳田利夫（室長）

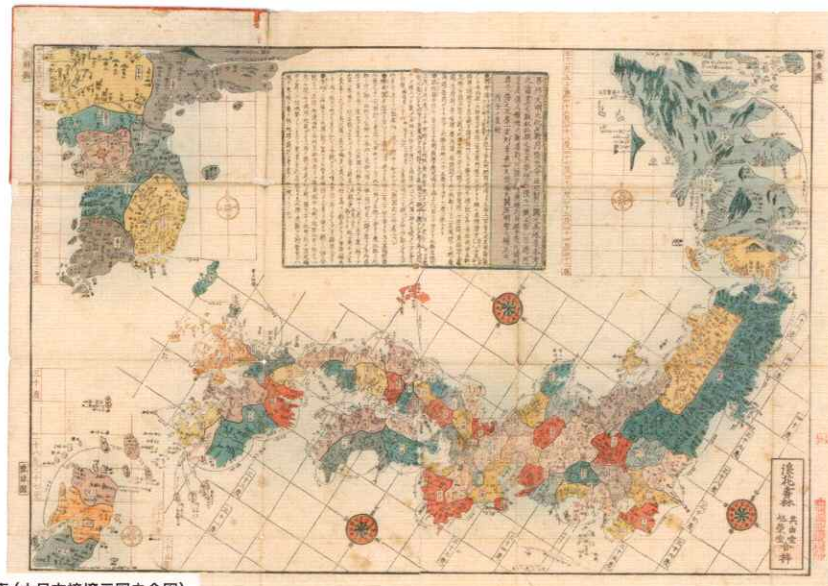
倉田敏子（副室長）

山本晶子・須藤遼

谷口みのり（スタッフ）



<http://kmj.flet.keio.ac.jp/exhibition/2017/>



朝鮮・琉球・蝦夷 (大日本接壤三国之全図)

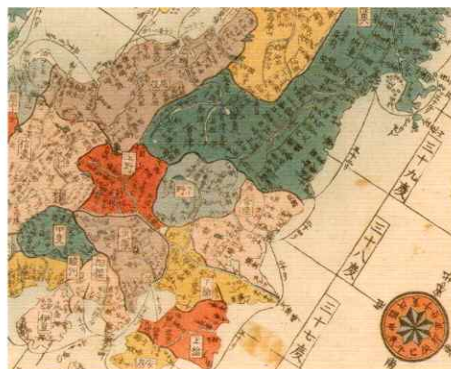
慶應義塾大学
文学部 古文書室

朝鮮・琉球・蝦夷（大日本接壤三国之全図）

文化 13（1816）年序



蘭学者の版元として著名であった江戸須原屋市兵衛が天明 5（1785）年に上梓した、林子平（1738—1793）原図の「朝鮮八道図」「琉球三省并三十六島之図」「蝦夷国全図」の三図に日本図を組み合わせ、大坂の書肆から刊行された日本と隣接三国の図。限られた紙面に三国を収めるため、日本図を 35 度ほど東に傾け、巨大に描かれた琉球本島と九州との距離を極端に縮めるなど、意図的な変形が施されている。日本本土・三国のそれぞれに、経緯度線と方位盤を配置し、「風土の寒暖」「地理の遠近」を想像できるよう工夫がなされている。本資料の記載情報は、林子平の原図のそれをそのまま踏襲しているが、僅かながら情報の付加や緯度の修正等も見られる。



<http://kmj.flet.keio.ac.jp/exhibition/2017/01.html>



訳官使船（朝鮮船入津及訳官行列之図）

訳官使船（朝鮮船入津及訳官行列之図）

安政 2（1855）年頃



江戸まで登った朝鮮通信使とは別に、宗家の慶弔や外交問題を処理するために、対馬に派遣された使節が訳官使である。寛永 13（1636）年以降定例となり、江戸時代を通じて 50 回以上派遣されたと言う。本資料は、安政 2 年 5 月 2 日に釜山の港を出帆した訳官使の乗船（千石積みの朝鮮船）が、4 日の昼に対馬府中浦湊へ入津したときの図である。使節一行は 85 人でその他に上官 28 人が乗船していたと記されている。描画はいささか稚拙であるが、訳官使の乗った朝鮮船の図は他にほとんど類例がない。



<http://kmj.flet.keio.ac.jp/exhibition/2017/02.html>



訖官使行列 (朝鮮船入津及訖官行列之図)

慶應義塾大学
文学部 古文書室

訳官使行列（朝鮮船入津及訳官行列之図）

安政 2（1855）年頃



対馬に上陸した訳官使一行の様子を描いたもの。本資料では、小通詞を先頭に、旗手、楽隊、軍官、上官など 55 人が描かれているが、一般に訳官使は 100 人程度で構成されていたと言う。500 人近い通信使と比べると小規模であるが、行列の構成は略同一で、正式の通信使の縮小版とも言える威儀のあるものであった。正使（堂上訳官）金聖始、副使（堂下訳官）李仲南などの記述から、安政 2 年の使節であることが知られている。本資料の絵師、作成年代、来歴等については不明であるが、訳官使行列図は残存するものが少なく、貴重な資料である。



<http://kmj.flet.keio.ac.jp/exhibition/2017/02.html>

一異國者凡俗不果内にあらず云云

仰るも所むあにわきに女所清純
夜更かし事奉ふてハ勤馬守役人達
其少長可恨事

一 張維炳 方江便之 証者 弘子 蕭 蕭

雙と稱ふも亦一切に死せる者なり

下にあつては、（一） 次散抄は、（二） 変せらるる

此後諸事一問一答乃得明白今男女

偽尼亦難已若教誨以心為幕席凡

子乃得至性之辭一語或飲食

新王の如く欲に迷ふ諸人を見て

子之遺弱へより天地の陽を妨く危う

さる事
物又情使来の幕金銀の扉凡そ

以て兄弟の隔を御事、禁制ニ及るべき

不端之族雖非孔乞人而猶方公以及王侯

新撰私領の奇社密を志す所のく

古通文 凡與同中書對寫卷一

泥之爲字可同音也

慶應義塾大学
文学部 古文書室

使節への対応（朝鮮人来暎（聘）に付御書付之写）

使節への対応（朝鮮人来耽（聘）に付御書付之写）

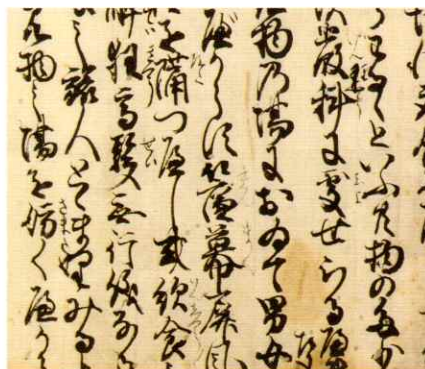
作成年代不詳

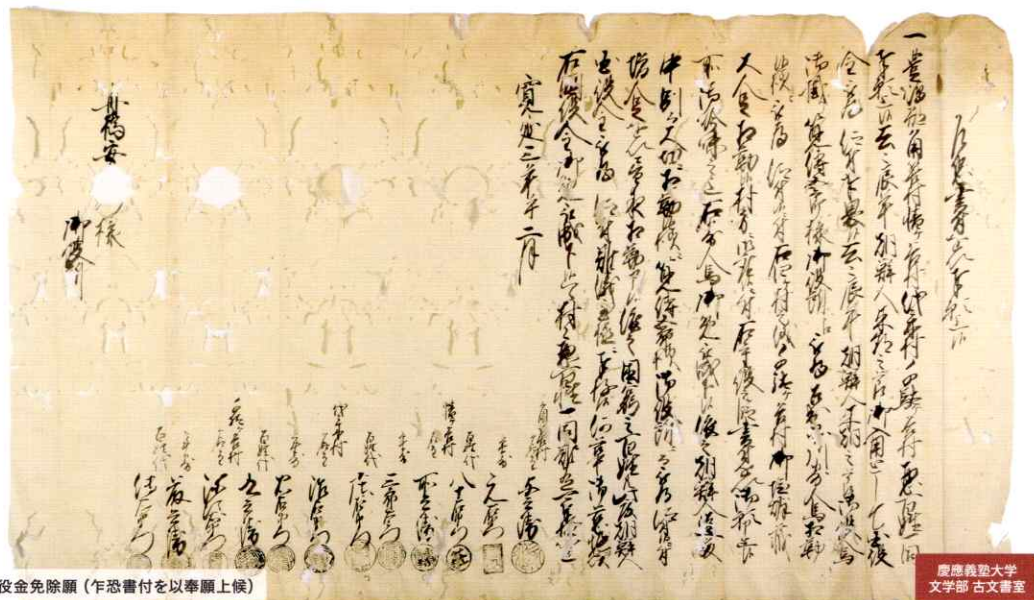


朝鮮通信使来日の際に通達された触書の写し。日本とは風俗の異なる朝鮮人が無礼な振る舞いをした場合の対応方法、通信使従者との私的商売の禁止、庶民が通信使の行列を見物する場合の注意事項などが、具体的に記されている。

幕府は、朝鮮人が許しがたい所業に及んだ場合、「対馬守役人」に報告してその指示を得るよう定め、文化や風俗の違いから生ずる衝突が外交問題へと発展することを危惧していた。また使節の従者が私貿易などを持ちかけても取り合わないよう命じ、後日露見した場合は厳科に処された。一方、見物人については、「男女僧尼」を屏風などで隔て、「酔狂・高声・無行儀なる」態度をとることのないよう戒めている。

<http://kmj.flet.keio.ac.jp/exhibition/2017/03.html>





国役金免除願（乍恐書付を以奉願上候）

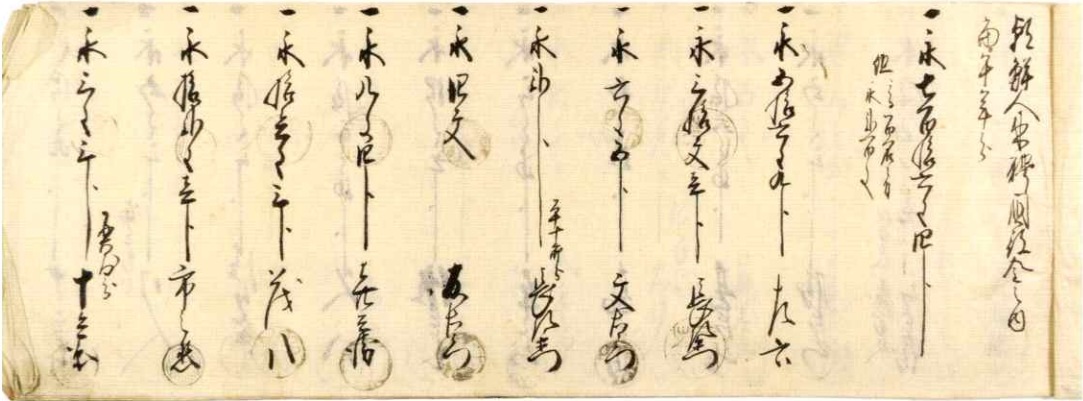
寛延3（1750）年2月



武蔵国豊島郡角筈村（東京都新宿区）、幡ヶ谷村、代々木村、千駄ヶ谷村（東京都渋谷区）4ヵ村の村役人が、朝鮮通信使来日にかかる国役金の免除を願い出たもの。本文書によれば、寛延元（1748）年の通信使来日（徳川家重将軍襲封祝賀）に際し、この4ヵ村は品川宿への人馬提供を行い、千駄ヶ谷村については塩硝蔵（焰硝蔵：火薬庫）の人足を供出した。また、人馬提供に関しては追加の「増人足」を昼夜にわたって務め、これらの負担により困窮しているため、さらに国役金を負担することは難しいと訴え、国役金の免除を願い出ている。国役金が入馬の提供と重複して賦課された事例であり、農村の負担の重さがうかがえる。

<http://kmj.flet.keio.ac.jp/exhibition/2017/07.html>





国役の負担 (朝鮮人來聘国役金取立帳)

慶應義塾大学
文学部 古文書室

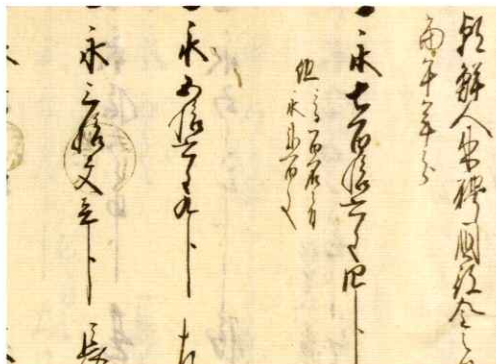
国役の負担（朝鮮人来聘国役金取立帳）

文化7（1810）年9月



当初朝鮮通信使が日本国内を通行する際の継送人馬役は、通常の助郷と同様、宿場近隣の郷村に人馬を負担させる形で行われていた。享保4（1719）年の通信使より、畿内から武蔵国まで16ヶ国に負担を命じる国役金として貨幣納の形で賦課されることとなった。本文書はその国役金の取立帳で、表紙に「辰より申迄五ヶ年賦」とあり、5年間分割で徴収されていたことがわかる。また、一人の百姓が二人分納めている記載なども見られ、百姓たちが国役金を工面していた様子がうかがえる。なお、この時の朝鮮通信使は、対馬での聘礼交換（易地聘礼）となった最後の朝鮮通信使である。

<http://kmj.flet.keio.ac.jp/exhibition/2017/09.html>





最後の琉球使節（琉球聘使略）

嘉永 3（1850）年頃



琉球王国最後の国王となる尚泰王（1843－1901）即位に際し、嘉永 3 年に江戸上りした謝恩使を紹介した刷り物。これが琉球王国が幕府に対して派遣した最後の使節団となった。

本資料の行列図では、路地楽や正使・副使・側近・武人らが表情豊かに描かれている。中でも華やかな衣装を身に着け銅鑼や喇叭など物珍しい楽器を演奏する路地楽は、「江戸立ち第一のけはい」とされ注目を浴びた。だが一年前後を要する江戸上りの旅は、不慣れな冬の厳しい寒さや長旅の疲労が重なり、客死する者も少なくなかった。嘉永 3 年の使節団に儀衛正（路地楽指揮者）として随行した高嶺親雲上魏国香も、江戸を目前に病死し、遠州浜松宿（静岡県浜松市）の西見寺に埋葬された。

<http://kmj.flet.keio.ac.jp/exhibition/2017/14.html>





琉球使節の入津（摂津名所図会 大坂部四下）

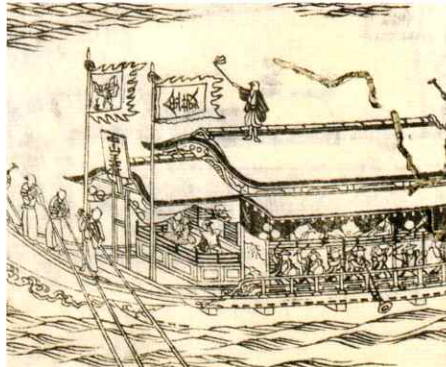
琉球使節の入津（摂津名所図会 大坂部四下）

寛政 10（1798）年刊

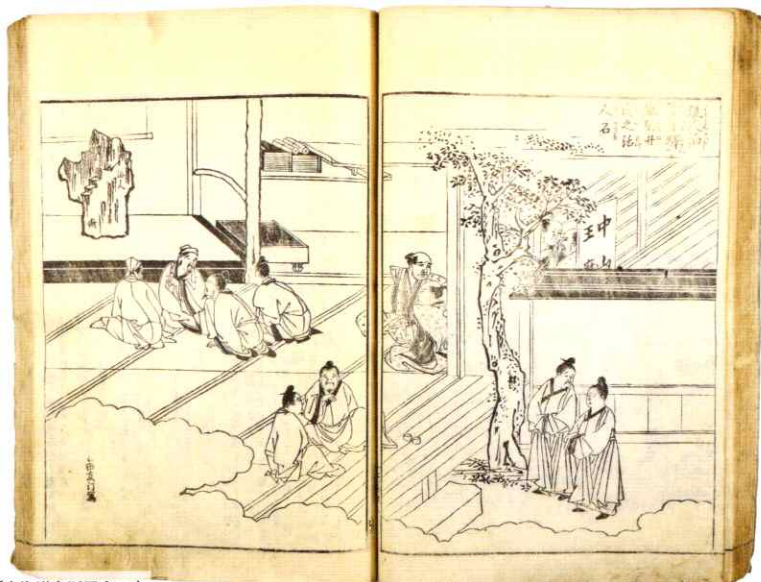


『摂津名所図会』は摂津国の名所・旧跡を描いたもので、全 9 巻 12 冊。著者は秋里籬島、挿絵主筆は竹原春朝斎。寛政 6（1794）年から 10 年に製作された。

本資料中には、「関西諸侯乗船 琉球人難波津着岸」の図として、大坂の難波津に琉球王国の使節団を乗せた船団が到着した場面が描かれている。船には「中山王府」の札が掲げられ、使節団を象徴する「金鼓」旗や虎旗（翼を持ち前足を掲げた虎）、楽器を奏でる人々の姿が見て取れる。航海や川上りに必要な物資や労働力は、幕府が航路付近の諸大名に供出を命じており、本資料においても、九曜紋や一文字三星紋が尚氏の左三つ巴と共に掲げられた様子が描かれている。



<http://kmj.flet.keio.ac.jp/exhibition/2017/15.html>



琉球使節との交わり (東海道名所図会 二)

琉球使節との交わり（東海道名所図会 二）

寛政 9（1797）年刊



『東海道名所図会』は、寛政 9 年に刊行された東海道の名所案内で、全 6 巻 6 冊。名所旧跡史跡の他、土地の伝説や関係する古歌、産業名産を紹介している。

本資料には、琉球の人々が近江国栗太郡草津宿（滋賀県草津市）に宿泊した際に、活人石なる奇石を見学している場面が描かれている。琉球使節団の服装は、幕府の威光を高めるため唐風に揃えるよう規定されていたが、そのことは琉球王国の独立国としての体裁を保つものでもあった。本資料においても、髪型・服装は唐風に描かれている。活人石については、かつてこの地にあった栗の大樹が、あまりに巨大で耕作の妨げとなったことから焼き払われ、その化石が土中から出てきたものと記述されている。



<http://kmj.flet.keio.ac.jp/exhibition/2017/16.html>



琉球人国役（日光御法会国役春夫羅内大坂夫羅内琉球人国役川々国役御伝馬買立祭礼割合帳）

慶應義塾大学
文学部 古文書室

琉球人国役 (日光御法会国役春夫雇内大坂夫雇内琉球人 国役川々国役御伝馬買立祭礼割合帳)

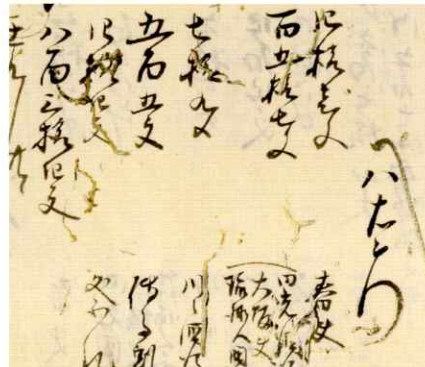


天保14（1843）年閏9月

天保 14 年に相模国愛甲郡半原村（神奈川県愛甲郡愛川町半原）下組が負担した、日光法会・琉球人国役・川々国役の国役金、春夫・大坂夫（労働課役）、伝馬・祭礼の負担金の割当を記録した帳簿。冒頭に高一石あたりに課せられる国役金と、家並一軒あたりに課せられる祭礼関係の税が記録されている。個別負担の記録に着目すると、琉球人国役は日光国役・大坂夫と合算されており、個別の名前の上には徴収を確認した形跡が見られる。

なお、本資料で記載される「日光御法会」は、天保 14 年 4 月 17 日に行われた 12 代將軍徳川家慶（1793－1853）の日光東照宮参拝を指しており、これが將軍による最後の日光社参となった。

<http://kmj.flet.keio.ac.jp/exhibition/2017/20.html>





蝦夷地の経営（蝦夷地御用に付御書付之写）

慶應義塾大学
文学部 古文書室

蝦夷地の経営（蝦夷地御用に付御書付之写）

寛政 11（1799）年 2 月

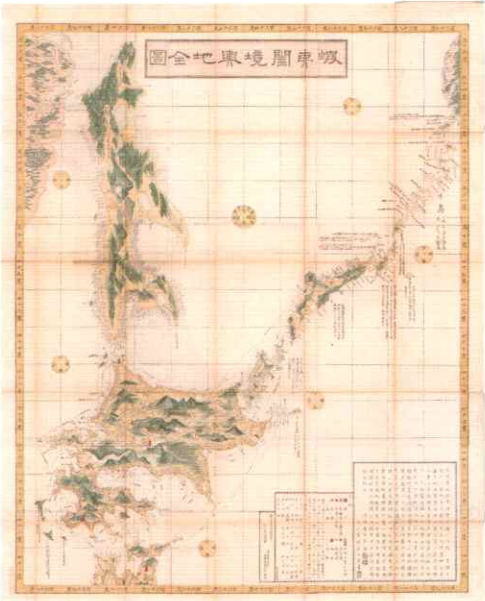


本資料は、寛政 11（1799）年 1 月の蝦夷地直轄化に伴い、翌月に老中松平伊豆守信明（1763–1817）より御用掛である書院番頭松平信濃守忠明（1765–1805）らに示された書付の写しで、上野国那波郡宮子村（群馬県伊勢崎市宮子町）で作成されたものである。書付には、蝦夷地のアイヌに教育を施して日本の風俗に帰順させる一方で、和人による不当な交易等を是正し外国の支配に下らないようにする等、直轄地化後の蝦夷地における行政上の留意点が記されている。

書付を受領した松平信濃守忠明は、同年春には蝦夷地取締御用掛筆頭として東蝦夷地に向かい、アイヌの保護、道路の開削、樺太東西海岸の探査等を指揮した。

<http://kmj.flet.keio.ac.jp/exhibition/2017/23.html>





蝦夷地絵図（蝦夷地全圖）

慶應義塾大学
文学部 古文書室

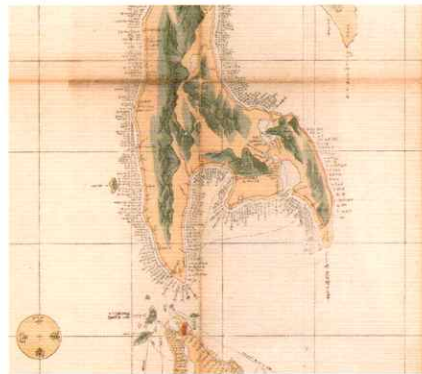
蝦夷地絵図（蝦夷閩境輿地全図）

嘉永7（1854）年刊



幕末の代表的な実用蝦夷地図。識語は藤田惇斎（生没年不詳）、図は浮世絵師の橋本蘭斎（歌川貞秀 1807–1873）。江戸書物問屋の播磨屋勝五郎（生没年不詳）により嘉永 6（1853）年に初版が出されたものの再版（翌 7 年刊行）である。詳細な地名や陸路・海路に加え、経緯度も正確に記されている。

本図の最大の特徴は、橋本蘭斎による立体的かつ緻密な描写である。蘭斎は初代歌川国貞(1786–1865)の門人で鳥瞰図を得意とし、横浜絵を数多く残したことで名高い。本図では山脈の高低が立体的に描かれ、平地や道路を色別するなど細密な描写に優れる一方で、航海用の目印となる岬を拡大するなど実用性を重視した描き分けが見られる。



<http://kmj.flet.keio.ac.jp/exhibition/2017/25.html>



貴人への挨拶（蝦夷島奇観 天）

作成年代不詳



寛政 10（1798）年の幕府による蝦夷地調査に同行した北方探検家・村上島之允（秦憶麿 1760－1808）により記録された蝦夷風俗絵巻の写本。アイヌの服装や入れ墨などの風俗、オットセイ狩や大祭イヨマンテなど集団生活の様子が描かれており、当時のアイヌの風俗文化を伝える貴重な史料である。この場面では、アイヌが貴人に挨拶する際の作法が描かれている。アイヌは貴人に向かい合って列座し、合掌した手のひらを「したした」と摺り合わせ、貴客をいただくように額の辺りで開いた両手を揃えて捧げ、甲を向けてそろそろと髪先まで降ろす動作を、三度繰り返したという。この画像は、手を摺り合わせる場面を描いたと思われる。



<http://kmj.flet.keio.ac.jp/exhibition/2017/27.html>



イヨマンテ (姫夷島奇観 地)

慶應義塾大学
文学部 古文書室

イヨマンテ（蝦夷島奇観 地）

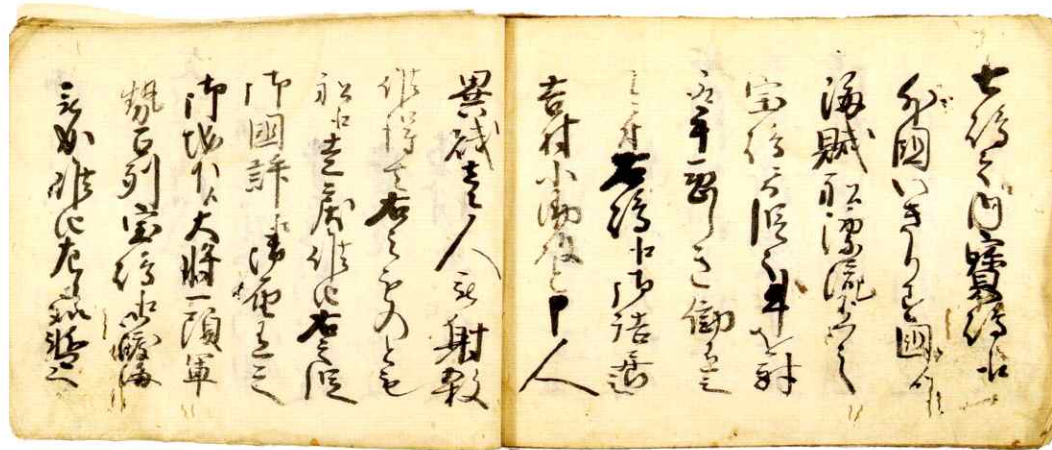
作成年代不詳



アイヌの大祭イヨマンテを描いた一場面。イヨマンテは、飼い慣らした熊を殺してその魂（カムイ）を神々の世界に送り返し、地上で大切にされた熊のカムイが天界に帰ったのち人間界に豊穡をもたらすことを祈願する、アイヌの伝統的な大祭である。ここでは、家婦の乳で育った熊を丸太で首を挟んで屠殺し、魂と分離した熊の肉体（肉や毛皮）を幣場（ヌシヤサンカタ）で丁重に祀る場面が描かれている。幣場では、屠殺した熊が中心に据えられ、周りにイナウと呼ばれる祭具や太刀短刀、金銀を施した器や宝器が飾られた。この後には、賓客として呼ばれた「支配人番人」である和人がアイヌと共に飲み明かし、熊の肉を羹にして食す場面も描かれている。

<http://kmj.flet.keio.ac.jp/exhibition/2017/27.html>





国の扶間（薩摩国大島喜界両島奉行記）

慶應義塾大学
文学部 古文書室

国の狭間（薩摩国大島喜界両島奉行記）

天保末頃



（奄美）大島・喜界島地方（鹿児島県奄美市・同県大島郡喜界町）は、幕末に至るまで表向きは「琉球道之島」と表現されていたが、慶長 14（1609）年、島津の琉球侵攻により中山王朝の支配から切り離され、薩摩藩の直轄地として、慶長 18（1613）年以降明治維新に至るまで、奉行（代官）、附役、横目などの役人が鹿児島から派遣されていた。本資料には、喜界島代官が大島代官から分かれ設置された後も、大島・喜界島両代官に関わる記録が併記されており、鹿児島県立図書館などに架蔵されている近代に入ってから作成された他の諸写本には見られない特徴を持つ。

文政 4（1821）年には、宝島（鹿児島県鹿児島郡十島村）にイギリスの「海賊船」が漂着し、島詰めの役人が異人一人を射殺するといった事件が起き、鹿児島から加勢の軍が送られたという記録が見られる。これまでの島津と琉球の關係に、新たな動きが加わっている状況が記されている。

<http://kmj.flet.keio.ac.jp/exhibition/2017/28.html>

